大人の英語の学び方
～認知科学の視点から～

Learning

今井むつみ（いまい・むつみ）

慶應義塾大学環境情報学部教授。専門は認知科学、言語心理学、発達心理学。1989年、慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程単位取得退学。1994年ノースウエスタン大学心理学部博士号取得。語彙の習得・学習のメカニズムを研究しているほか、「学び」についての認知科学の研究成果を教育現場での実践に生かすべく活動している。著書に、『ことばと思考』『学びとは何か――〈探究人〉になるために』（以上、岩波新書）、『ことばの発達の謎を解く』（ちくまプリマー新書）、『言葉をおぼえるしくみ―母語から外国語まで』（ちくま学芸文庫、共著）など。

第8回

リスニング力をアップさせるための合理的な学び方

認知的な負荷が高いリスニング

前回のリーディングに続き、今回はリスニングについて考えよう。前回、多読学習を有意義にするには、テキスト中の単語はほとんど知っていて、内容をつかむのに神経を集中できるレベルが望ましいと述べた。リスニングはそれにもまして適切なレベルと内容の教材を選ぶことが大事である。

リスニングというのは、リーディングよりもずっと認知的な負荷が高い。リーディングはスピードを自分で決めることができ、途中で意味が追えなくなってしまったら戻って再度読むこともできる。しかし、リスニングは、聞こえてくる音声のスピードは自分では調節できない。それでも生身の人が相手で、自分一人に話しかけてくる対話の状況でならリスニングもずっと楽になる。相手がこちらの表情を読み取り、必要に応じてスピードを調節してくれたり、繰り返してくれたりするからである。収録された媒体からのリスニングはそれよりもずっと難易度が高くなる。それでも映画やドラマはビジュアルの情報があるし、ストーリーもあるので、文脈から情報を得やすい。

本連載中に何度か述べたが、人は入ってくる情報を、まったく何も考えず受動的に受け取っているわけではない。常にスキーマ（知識のかたまり）を使って、次の展開を予測する。次にどのような意味の内容を話者が言うかを予測し、そこから単語も予測する。そのような予測ができないと、内容を理解することはほぼ



Gregory, Richard. 1970. *The Intelligent Eye.* New York: McGraw-Hill

不可能になる。認知心理学のテキストに必ずと言ってもよいほど取り上げられる古典的な現象に「ダルメシアン知覚」というものがある。上の図を見てほしい。この中に何がいるだろうか。多くの人は分からないと思う。しかし、「ダルメシアン犬がいるから見つけてください」と言うと、すぐに見つけることができる。何を見るか予測ができないと見えないものも、これがあるはずと知って見るとそれが浮かび上がってくることがある。そして、いったん見つけられると、その後はごく自然にダルメシアン犬が見えるのである。

予測ができなければ聴き取れない

「聴く」ときも同じである。どのような内容の言葉が耳に入ってくるかが予測できないと、知っている言葉でも聞こえない。先日、スパイ映画007シリーズの最新作（と言っても2015年制作なので、あまり新しくない）の「スペクター」を飛行機の中で見た。この映画で登場人物が話す英語に感動してしまった。何しろ、

1811_bizcom_082-087_CognitiveS.indd 82-83 2018/09/13 10:37

あることを言うのにまったく無駄がなく、もっとも短く端的に言う。それがほんとうにカッコよいのである。セリフを全部聴き取りたいと思い、DVDを買ってみた。主題歌が特にすてきで、何度も聴いたのだが、歌詞の“Could you ○ my fall”の○の部分が何度聴いても分からなかった。日本語字幕では、「落ちる僕を支えてくれるかい」となっている。そこで、ネットで歌詞を探して確認したら、なんと、“break my fall”だった。私はbreakという単語はもちろんよく知っている（と思っていた）し、日常的に使っている。しかし、「支える」という字幕の日本語に引っ張られ、この文脈でbreakはまったく考えつかなかった。Breakはあえて日本語にするなら「断絶する」という意味が近いので、「支える」とbreakは反対の意味だからである。しかし、まさに「ダルメシアン知覚」の聴覚版で、一度breakだと分かれば、まったく問題なくbreakと聞こえるのである。つまり、熟知している単語でも、その単語が使われることが予想できなければ、聴き取りができないのである。

スキーマを想起し、予測をするのに、人は耳からの情報のみに頼るわけではない。背景の視覚情報、話す人の表情、文脈情報は、とても大事だ。だからそのような情報が豊富にある直接の対話はもっとも聴き取りやすいし、ストーリーが予測できる映画やドラマも理解しやすい。

その意味で、もっとも認知的にハードルが高いのが、大学入試やTOEFL、TOEICなどの資格試験でのリスニングテストの方式、つまり、視覚情報や背景情報なしに録音された音声の聴き取りを求められる状況だ。短いダイアローグやパラグラフが文脈情報もなく視覚情報もなく放送されるので、スキーマを想起しづらい。何の話だろうと思っているうちにどんどん音声は流れてしまい、予測が追いつかなくなって、置いていかれてしまう。

試験の形態が録音された英語の聴き取りだから、リスニングの勉強はそれらの対策参考書についてくるCDを聴いて勉強するのがよいと思っている人は多いだろう。しかし、それは学習の認知メカニズムの観点からははなはだ疑問だ。リスニングは自分のペースで情報処理ができないので、知らない単語が出てきて、そこで情報処理が止まってしまったらその先に進むことが難しくなってしまう。先日、TOEFLリスニング対策の本を買い、模擬問題を聴いてみた。



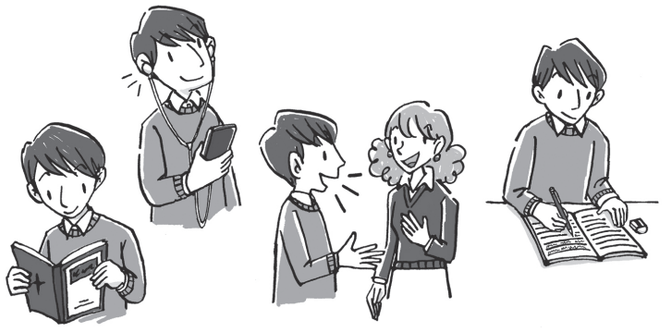
大学の図書館でアルバイトを募集していて、それに応募したい大学生と、図書館のスタッフとの対話だった。ある程度の語彙力がある受験生にとっては、スピードや単語の難易度は適切だと思えた。しかし、アメリカで大学生活を経験したことがない学習者にとってはスキーマがあまりない内容で、その経験のない日本人が一生懸命聴いても行間を埋められず、やはりついていくのは難しいのではと思った。情報処理できない内容を何度繰り返し聴いても何も残らない。つまり何も学ぶものがなく、ただ時間を浪費することになるのである。

効果的なリスニング学習とは

前回の連載で多読学習について述べたことと重なるが、リスニングの学習に時間を使うなら、そこから何を得たいのかを先にきちんと考えるべきだ。まず耳を慣らすことを目的にするのか、内容をだいたい把握できることを目標にするのか。

「耳を慣らす」とよく言う。例えば同じ英語でもイギリス英語とアメリカ英語、オーストラリア英語、インド英語では、発音やイントネーションなどが大きく違う。確かに耳が慣れていないと聴き取りが難しいことがある。私にとっていちばん耳慣れているのはアメリカの標準英語である。イギリス英語もたいていは分かる。しかし、まったく理解ができない経験をしたことがある。イギリスのバーミンガムに行ったときだ。ホテルのフロントで、チェックインのときに従業員の言っていることがまったく分からなかった。翌日、バーミンガム大学で、共同研究者の学生さんと話したときも何を言っているのかまったく分からず、ドイツ人の研究者に英語の通訳をしてもらわなければならなかった。内容的には分からないはずはないので、日本に住

1811_bizcom_082-087_CognitiveS.indd 84-85 2018/09/13 10:37



んでいるため英語のリスニング能力がずいぶん衰えてきているのかと少なからずショックを受けた。しかし、バーミンガムはイギリスでもなまりが強いことで有名で、当初戸惑う人は多いと後から教えてもらった。私に対する慰めではなく、本当なのだ。考えてみたら、日本の中でも、慣れない土地でいきなり方言を聴くとよく理解できないことがある。それと同じだ。バーミンガムの英語も、何日か滞在するうちに耳も慣れ、普通に理解できるようになった。

しかし、すぐに耳が慣れて聴き取りができるようになったのは、相手が使う単語をほとんど知っていて、かつ内容についてのスキーマが十分あったからである。方言、アクセント以前に、スキーマがない、語彙が足りない場合には、リスニングを試みて聴き取ろうとするより、まず語彙を増やすことに時間を使ったほうが有効である。急がば回れ、である。

4技能をバランスよく育てるには

文部科学省の方針で、従来の読みと文法の重視、つまり、英語を受動的に理解することばかりを重視した英語教育から、アウトプットのできる能力を育成する教育に転換しようとしている。そのため、リーディング、文法のほか、スピーキングとライティングを加えた4技能を重視し、それを大学入試にも含めることになった。アウトプットできる英語を育てる必要がある。これには百パーセント賛成である。しかし、4技能をバランスよく育てるために、最初から4技能に同じ時間だけ使うというのは認知的には理にかなったことではない。

語彙が少ないうちは、知らない単語がたくさん含まれる教材を無理に聴く練習をしても意味がない。英語がただ素通りしていくだけである。しかし、だからといって、あまりにも簡単な、聴いても面白くも何ともない内容で中学1年生レベルの単語を使って不自然にゆっくりと録音された教材を聴いても――仮にそれが聴き取れるようになっても――ビジネスには役に立たない。ビジネスの場面で、そのようにゆっくりした、内容が薄い会話がされることは絶対にないからである。自然なスピードで話され、中身がある内容を、語彙が足りなくて聴き取れない場合はどうしたらよいか。リスニングに時間を使うより、まず語彙を強化することと、その分野の記事や論文を読んで、その分野のスキーマを身につけることに時間を使ったほうがよい。語彙が豊富にあり、スキーマが働くトピックなら、そして、ここが大事なのだが――自分が絶対に理解したいと思う内容であれば――少し耳が慣れれば英語は自ずと聴こえるようになる。

そこで振り出しに戻ってしまう。語彙を増やすにはどうしたらよいか。先月号の連載でも述べたが、何かをよく（深く）学ぶためにもっとも大事なことは、深い情報処理を行うことである。何かを深く情報処理するためには、内容の意味を考え、予測しながら情報処理することが欠かせない。もっとも深い意味処理は、その情報を自分で復元するときに起こる。だから「使える」アウトプットをすることができる語彙力を身につけるには、アウトプットの練習をする必要があるのである。ただ、語彙力、それも単に単語をたくさん知っているという意味での語彙力ではなく、文法とリンクされた「生きた知識としての語彙力」が十分でないと、いきなり難しい内容の日本語を英語にする英作文は難しく、下手をすると時間をたくさん使っても、効果に結びつかないことになる。手が出ないことをただやれと言われても、モチベーションも上がらない。来月号では、お気に入りの映画を材料にして、「生きた語彙力」と「英語スキーマ」を習得し、同時にリスニング能力の向上も期待できる、私のお勧めの方法を紹介したい。

次号予告

第9回　お気に入りの映画を使って「生きた」語彙の知識を身につける

1811_bizcom_082-087_CognitiveS.indd 86-87　2018/09/13 10:37